

日本イーライリリー ヤングケアラープロジェクト 対談レポート ～神戸市 子ども・若者ケアラー相談・支援窓口～

2022 年から始まった、日本イーライリリーによるヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けた取り組み。2023 年、その活動をさらに進化させるべく、ヤングケアラー支援を行う様々な団体と情報交換や連携を進めています。ヤングケアラー支援の課題や注意点とは？その中で企業が果たせる役割とは？社員がお聞きし、気づきと学びにつながった対話の一部をご紹介します。

—今回は、神戸市福祉局相談支援課 こども・若者ケアラー相談・支援窓口より担当課長の上田さん、担当係長の霜川さんをお招きし、お話を伺います。神戸市は全国の自治体に先駆けて、ヤングケアラー相談窓口を設置しておられますね。

はい。2020 年 11 月のプロジェクトチーム立ち上げ後、介護保険のケアマネジャー等現場スタッフやケアラー支援団体等にヒアリングし、必要な支援策を検討した結果、2021 年度から 3 つの取り組みを始めました。①相談・支援窓口の設置、②ヤングケアラーの身近にいる方々に対する研修等を通じた理解促進、③当事者同士が交流・情報交換できる場づくりです。なお、支援対象は「こども・若者ケアラー」とし、20 代の若者も含めています。

—我々も昨年からの活動を通じてその現状について学びを深めていますが、子どもが自分をケアラーだと認識することはとても難しいと聞きます。当事者の声を拾い上げるような工夫は何かしていらっしゃいますか？

まず子どもや若者にとってケアは、保護者の監督がなかったり、自由になる時間や選択権がない点がお手伝いと異なりますが、その境界は明確でなく、実態も多様です。そしてケアラーにとって、ケアを担うのは「当たり前なこと」という認識が多く、自分がヤングケアラーだとは思っていない。それでも、時に「つらい」という感情は生まれます。

そうした感情に気づきやすい 1 つが教育現場です。そこで、教員らの研修でヤングケアラーについて説明し、我々相談・支援窓口を紹介しています。また、小中高校や大学へのリーフレット配布、スクールソーシャルワーカーへのアプローチ等にも努めています。

—なるほど。周囲の大人が、ヤングケアラーの声に気付くことが大事ですね。当社でも、ヤングケアラーの存在や

声に気付く大人が増えればと、社員だけでなく社員の家族、加えて社外へと認知の輪を広げていこうとしています。

当事者のヒアリングでも、「先生から、休めているか？と声をかけてもらい、自分の状況をわかってもらっていると嬉しかった」という声を聞きます。

今、少しずつですが学校や福祉等の関係者に支援の視点が広がったことで、相談・支援窓口へとつながるケースも表れ始めています。我々に相談が持ち込まれたケースのうち、2023 年 4 月 30 日時点で 150 件が支援の対象となりましたが、最も多いのは関係機関、特に学校からの相談です。当事者からの相談は 8 件で、すべてが高校生以上。一方で小学生については家族、それもケアされる側の親御さんからの相談も見受けられます。

—ヤングケアラーのご家族から相談が来るんですね。そうしたケースであれば、第三者が支援に入りやすそうです。

はい。相談の時点で既にケアが行われており役割も固定化された状態が長期化していれば、外部からの支援を拒否される場合があります。一方、ご家族からの相談が多いのはケアが始まって間もない初期の段階なんです。その状況であれば、「予防的支援」として対策をご家族と一緒に考えていくことができます。

ケアが継続している段階での支援



予防的支援

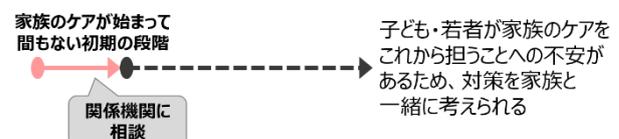


図. 予防的支援の重要性 (神戸市 こども・若者ケアラー相談・支援窓口との対話をもとに、日本イーライリリー作成)

—子どもによるケアが「当たり前」になる前に支援につなげることが重要ということですね。そうすると、幅広い広報啓発が必要になると思いますが、我々のような民間企業への期待を教えてください。

民間企業の柔軟な発想です。特に広報啓発や周知を促す取り組みにおいて、民間企業は市民へのアプローチにも長けているように思います。そういった点での我々へのアドバイスや、自社の資源を活かした取り組みを通しての協働も期待しています。

—一方で、広報啓発を行う際、ヤングケアラー自身、そしてご家族の受け取り方、気持ちへの寄り添いは忘れてはいけないポイントですよ。昨年の活動の気づきとして、「『ヤングケアラーは可哀想な存在』と決めつけてはいけない」ということが印象に残っています。神戸市が当事者を含む社会にメッセージを送る際に気を付けていらっしゃることは何でしょうか。

子どもはこれから人生の基礎を学び、将来を選択する時期を過ごします。その中でケアを優先せざるを得ず、選択肢が限られる状況は、子どもの将来にも大きな影響を及ぼしやすいと思います。

ただ、家族に対するケアは、それ自体が悪いものではありません。いま全国で支援の機運が高まっていますが、ヤングケアラーを正しく理解できていないのではないかと感じるがあります。可哀想な子という点だけがクローズアップされるのは、本人もご家族もつらく感じてしまう可能性があるんです。また、自分達でどうにかしたいと考える家族もあり、そうした多様な家庭の考え方を受け入れる姿勢も大事です。

我々の支援によって、ケアラーが担っているケアをすべて解消することは困難です。ただそのような中でも、たとえばケアマネジャーが要介護者に対する支援の視点からケアプランを作るとすれば、そこに介入し、ケアラーを含めた家族全体を俯瞰して、子どもの負担も軽減できるようプランを調整してもらおう。我々の役割としては、そのような、支援制度をヤングケアラー支援の視点で調整していく「つなぎ役」になることを目指しています。

—「ケアをすべて解消することは困難」というのは、支援の方向性を考えるにあたって分かりやすいですね。本日は行政の観点から実態も踏まえてお話をいただき、多くの気づきが得られました。学びを活かしながら、今後も当社はヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けた活動を考え、社会と共に進めていきます。

ヤングケアラーについて特別なことだと捉えるのではなく、正しく理解した上で、社会がどう支えていくのか、より多くの皆さんで連携しながら考えていくことが必要だと思います。引き続き、よろしく願いいたします。

—ありがとうございました。

■ 神戸市 こども・若者ケアラー相談・支援窓口

(https://www.city.kobe.lg.jp/a77853/kodomo_wakamono_carer.html)

2023年8月
日本イーライリリー株式会社